

時代をつづる

桑園碑

知事公館の敷地内にある桑園碑には、桑園の名前の由来や歴史が刻まれています。ちよつとしたミステリーもあります。その事情は、どのようなものだったのでしょうか。

明治八年（一八七五年）、開拓使は札幌の南一条から北側で西八丁目から西の地域を開拓して、養蚕業を奨励することを決めました。そこで、五年に広大な林地を桑畑にすることに成功していた山形の旧庄内藩士に桑畑の造成を要請しました。

これは、山形出身の大判官松本十郎まつもとじゅうろうが黒田開拓使長官に強く進言したものとされます。

これにより、八年六月四日から九月十五日までの間、百五十六人の旧庄内藩士がこの地に赴き約二十一万坪の土地を開墾し、桑苗四万株を植えました。

その後、藩士は山形に帰りましたが、新たに本州から養蚕を志した人たちがこの地に住み始めました。以来、この地域を桑園と呼ぶようになりました。

このような歴史が刻まれた「桑園碑」は、昔、桑園開拓の事務所があった知事公館西門のそばにひっそりと建っています。この碑は最初、木でできたものだったそうですが、腐ってしまったため石に刻み直されたという話です。



静かにたたずむ桑園碑

この碑石には、最後の部分に新仮名遣いで驚くようなことが書かれています。実は、桑園碑はもともと東門側に明治四十五年建てられました。日露戦争以降の軍国化が進む中で、碑文は「国富在農」に刻み変えられたというのです。現在、西門にある桑園碑は、昭和四十年に有志により新たに建てられたものだったので。

桑園地区では毎年八月に桑園碑の前で開拓者の労苦をしのび、これに感謝する「桑園開拓まつり」を開催しています。（平成十六年から三年に一度開催）なお、この「国富在農」の碑は、東門側に現在も残されています。

（平成七年十月号・第二十四回）